

幼児最初の學校生活

東京女子高師訓導

山内俊次

— 『幼児教育』第二十三卷第四号

(一九二三年) から —

(弊誌は、第十九卷第一号から第二十三卷第六号まで『幼児教育』でした。)

私は、昨年四月以来尋常科第一学年児童三十名(男女各十五名)を担当いたしました。丁度一ヶ年どうやら過ぎました訳であります。今日静かにふりかへつて見ますと、誠に思ひなかななものが多々あるので、実に汗顔の至りであります。

はじめ、私の最も留意いたしました事は、外でもありません。児童の幼稚園乃至は家庭

生活から學校生活への過渡期を如何に取扱ふべきかといふ問題でありました。

この問題は私にとつては相當に難問題でありました。抑々學校生活の最初の一步は、彼等の全生涯から見ての一大変化であつて、而も極めて急劇な変化であります。従つてこれがかよはき幼児の身心に及ばず影響たるや決して軽々しく見ることが出来ない。況んや彼等身心發育の方面から見ても極めてその旺盛な時期であると同時に、統計上罹病率といふもの、甚だ高い時期であることは、一入注意を要する問題であるからであります。

最も新入児童の中には、それらの幼稚園生活をして来たものがあります。これは家庭生活から直ちに學校生活へ這入るものに比して割合にその変化の程度は少なからうと思はれます。故に全部の児童が幼稚園生活をして来た場合は、これは甚だ好都合であつたらうと思はれます。何故ならば、幼稚園生活は、

丁度家庭生活と学校生活との中間生活としても見得る点があるからであります。この意味に於ても、私共は今日の幼児教育といふものの普及を一層發達せしむべく乞願ふ次第であります。

然るに私の学級児童について見るに、その過半は依然家庭生活から直ちに学校生活へと這入つたものであります。最もその家庭生活の良否といふことは別問題といたしまして、大部分の児童がそれでありませうからその点には少からず考慮したのであります。少数であつても、兎も角幼稚園生活を終へて来たものもあります。ですから、これを亦度外視する訳にも行きません。従つて三十名の児童の個々について各々異つた事情のあることは、私共も少からず考慮を要する点であつたのであります。

二

未だ全く無經驗であるべき学校生活といふ

ものに対する新入児童の予期といふものは果してどんなものでありませうか。どうもそれらに対しては一般家庭に於て妥當な取扱ひのしてないものが多いではないかと思ひます。徒らに大人の考を以て学校へ行つたらばあ、しなければならぬ、こうしてはならぬなどと、未だ児童の必要にも迫らざることにまで及んで彼此と我が子を思ふのあまりにやかましくいはれた子供は果してその入学当初を幸福ならしめる所以でありませうか。私共は實際さういふ風にして来た児童をまのあたり見るにつけてもその決してほめるべきことでないことを痛切に思ふのであります。むしろ家庭に於ける本来の子供らしい他所行きでない、ありのまゝの子供の方が自然であり、幸福であることを熟々思ふたのであります。これがそもそも学校生活に入るのスタートを健全ならしむべく大切なことだと思ひました。

さてかくして学校生活に入つたものに対し

ては、先づ以て彼等の社会的生活の益々拡張されたことを新らしい喜びとして感ぜしめねばならぬ。彼等と教師との心の接触をいひしれぬなつかしみとして感ぜしめねばならぬ。学校の所謂校規いわゆるともいふべきもので律しやうとするが如きことことは、幼児最初の学校生活に對しては無用のことであると信ずるのであります。多人数団体生活による必要に迫られて規約も構成し創造していつたらよからう。

今まであまりに時間的に規律立つた生活に経験の乏しい幼児に對して、鐘の合図で教室に入り、四十分か四十五分で、更に鐘の合図で運動場に出る、かくして毎時の終始を鐘の合図によらねばならぬといふことは、幼児最初の学校生活としては、稍々適切を欠きはせぬか。私はこんな考へから、随分大胆に第一期の殆んど大部分を、合図の鐘を度外視して進みました。

第一時間割表といふものを、厳肅に定めな

いで、極めて大体の予定を教師の方丈け定めておいた訳であります。そして時間的には極めて自由を与へて見たのであります。だから学校といふ所は鐘の合図で教室の出入をするものだといふ様な感じはもたしめなかつたのであります。

だから教授時間といつても教師のお話から初まつて、途中順次に変じ、それがやがて自然動作を伴つて遂には唱歌遊戯となりなどすることもあり。絵雑誌を登校時挙つて見ることから、一人その画の説明を教師に對してするものがあると、又二人三人、それが段々全体に對しての説明となり、遂には話し方、聴き方の練習になることもある。或る時は図画に於てその経験を記憶によつて発表することから、その説明となり、多数の成績を陳列しては相互に批評せしめるといふ様にして、一連続の作業を終るや、教師児童打つて屋外に出で、自由遊戯から、団体遊戯に変化する

こともあり、団体遊戯から各自の思ひ思ひの遊戯になることもあります。かくして適當の機会に又教室に入るといふ様な状態であつたのであります。

或は思ふ人があるであらせう。それでは如何にも最初の学校生活が放縱と選ぶ所がなからうと。生きた教師はそこに常に侶伴者として彼等の登校時から下校時まである以上、さうした杞憂は一としてあるべき筈はないのであります。そしてその間に相當の課程をも終らねばならぬし、学校生活の第一歩をして健全に且つ意義あらしめねばならぬ。かくして、各個人の傾向といふものをも正確に査定してそれに適應した指導をもしなければならぬ。初学年児童のかうした取扱に於て教師の任務の愈々重且大なることを思はねばならぬのであります。

三

私の学級は矢張り四間と五間の部屋であり

ますがそれでも児童数が三十人であるし、大テーブル五脚あつて、それに三十人の子供が夫々分れてるのですから、つまり一脚のテーブルに六人の子供が向き合つて腰かけてゐる訳です。そしてお互に睦しく話しながら、夫々の作業をするのであります。彼等が彼等の作業を余念なくする間に彼等同志に睦しく話しをすることは極めてナチュラルなことであつて、又極めて麗はしいことである。従来教授時間とし云へば、極めて静肅であることを予想する様なことのは何たる不自然なことでありませう。かくては尊き生命を有する児童を人として物として取扱つた様なものではありませうまいか。

学校へ入学すると彼等が家庭生活に於ては到底経験し得ざることによく遭遇するであリませう。それは外でもありません。先づ一人机か二人机によつて。四角な広い教室へ、隅から隅までぎつしりならべられた机にとつか

ねばならぬことであります。

その机間といへども時に体を横にせねば通られないといふ学校も今日尚少くないのであります。かくの如きことは、今日の経済状態に於ては容易に解決のつき兼ねることながら、果して幼児最初の学校生活に於てよい影響を与へるものであらうかどうか。私は前から度々申して参りました様に、学齢に達した児童が学校に這入つて多数の友だちを得ることにより、彼等のやがて社会生活への第一歩となす所に、大いに意義あることは認める。然しなから、教室の隅から隅まで机で以て埋められた中に、各児が規則正しくその場を定められ、一壇と高い所に教師がいかめしく構へ、前に教卓を据え、鞭を打振りながら壇上に活躍するのは教師その人のみであるといふことは、何たる教師本意のことでありませう。未だ学校生活の何物たるかをもわきまへない幼児最初の取扱ひに於てかゝる方法をとるとするな

ら、あまりにしのびないことでありすぎると思ひます。

今日一学級の児童数をなるべく少くすることは理想としつゝ、一面又已むを得ずこれを実行し得ないといふことは遺憾千万なことだと思ひます。せめてもその取扱ひに於ては、特に幼児最初の学校生活に於ては、かくも狭苦しい部屋にのみ閉ぢこもらないでよろしくオープンエーヤで以て教授を進めて行きたいと思ひます。狭苦しい部屋でなければならぬといふ理由がどこにありませう。

それらの点から申しますと私の学級の如きは、或は理想に近い程かとも思はれます。時には教室の何れの部分へでも、各自腰掛ばかりを携へて自由に集合して、其日経験した子どもを各児話しあひ、その機会に於て児童の現在の生活に即した、生きた修身教授になることもある。彼等の共同製作の様なものも教室の一方には広く場をとつて列べることも

出来る。一方には書籍棚をそなへて。適當な読物を多くそなへおき、各児の必要に応じて自由にこれを読むの設備も裕に出来てゐるといふ様なことは、幼児最初の学校生活に於て少からず有効なことで子供の為めに如何にも幸福なことであつたかの様に思はれます。

四

私の学級に於ては、多少新らしい試みとして従来の学級教授と異つたことをもやつてゐます。即ち一斉教授といふことを少くして個別指導といふものに力をつくしてゐることなどともその中の一つであります。従つて、必要に應じて、時には一時的に席を定めることもないではありませんが、平生に於ては、テーブルが五脚あるだけで、何処でもかまはない。自習時間の如きは書棚の前に書物を見るものもあれば、窓際の棚の上で絵を描くものもある。テーブルについてしきりと何か綴り居るものもあれば、折紙の飛行機を盛につくつて

ゐるものもある。さうかと思へば数名のものが計算カードによつて計算練習の競争をやつてゐるものもあるし、窓下で運動に余念のないものもある。かゝる自由作業の間にも常に、彼等の幼稚ながらの計画目的に対して兎も角、それを遂行しなければ止まないといふ様に訓練したいと考へてゐました。そしてそれを無理に押売りに幼児に要求することは夢々したくない。自然の間に子供らしいさうした態度を養ひたいと考へてゐました。

やつと今日ふりかへつて見る時に、多少その点丈は大いに見えるべきものがあつた様に思ひます。学級全体を通じてその学習態度なるものは実に喜ばしき傾向が芽ざしてゐることを認めるのであります。けれどもこれが、果して持続するものかどうかわかりません。唯返す返すも遺憾であつたことは、私が最初に計画しやうとしたことの多くは遂ひに思ふ様に実行出来なかつたことでもあります。

五

私の幼児最初の学校生活に対して、今日まで実際とり来た^{きた}方針は、大体に於て今少しく幼稚園生活的ならしめたことであります。これが家庭生活から学校生活への急変を幾分なりとも緩和することであり、幼稚園から来た者に対しては、その幼稚園生活の延長とも見ることが出来ませう。然しながら茲^{こゝ}に一言したいことは、かうした取扱ひは、必ずしも現行の教科課程を軽減して教授の効果を低下せしむる所以でないといふことであります。幼児最初の学校生活をより幸福ならしむべく努むることは、むしろ彼等将来への学習能力を一層高むる所以であることを深く信じて疑はないのであります。

*本文の旧漢字を新漢字に直した以外は原文のまま掲載しています。なお適宜ルビを振りました。(編集部)

幼児の教育 バックナンバーを
WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で

検索 



お茶の水女子大学 教育・研究成果コレクションTeaPot
<https://teapot.lib.ocha.ac.jp/> の中にあります。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成27年発行の
第114巻第1号までご覧になれます。